
俺様の弟を紹介します。

游軌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺様の弟を紹介します。

【Nコード】

N1197S

【作者名】

游軌

【あらすじ】

最愛の父を亡くしたギルベルトの元にある日突然一人の少年が訪ねてきた。その少年は自分の弟を名乗ってきて――。
芋兄弟を中心としたパラレルです。

00：設定（前書き）

芋兄弟を中心とした家族パラレルです。

今回は中心人物の設定です。

00：設定

ギルベルト・バイルシュミット（20）

一応主人公。社会人。好きなものはビール。父を尊敬している。周りに軽く（？）ウザがられたりもするが行動力など一目置かれる所も。典型的な不憫体質。

ルートヴィツヒ・バイルシュミット（13）

ギルベルトの腹違いの弟。良くできた弟。中学一年。真面目な性格でルールや規律には厳しめ。日々の筋トレが日課。

フランシス・ボヌフォワ（20）

近所の美大生。ギルベルトとアントーニヨとは中学からの悪友。自称博愛主義者で美しいものが好き。よく脱ぐ。

アントーニヨ・ヘルナンデス・カリエド（20）

近所の農大生。天然。トマトが好きで大学卒業後は野菜農家になるつもり。

アパートの隣に住んでいるヴァルガス兄弟を溺愛している。ペドっぽい。

フェリシアーノ・ヴァルガス（12）

ルートと同じ学校に通う少年。中学一年。喧嘩が大の苦手で暴力も嫌う。ヘタレ。パスタとピッツアが好きなお茶目さん。

ロヴィーノ・ヴァルガス（13）

ルートと同じ学校に通う少年。フェリシアーノの兄。中学二年。アパートの隣のアントーニヨが気になる（色んな意味で）。ヘタレ。

アルフレッド・F・ジョーンズ（12）

ルートと同じ学校に通う少年。中学一年。持ち前の運動能力を買われて色んな部活に助っ人として引っ張りだこ。元兄であるアーサーには冷たい態度を取る。

アーサー・カークランド（19）

とある国立大の法学部に在学。皮肉屋。フランスとは昔馴染みで犬猿の仲。アルフレッドとの確執をどうにかしたい。

01：出会い（前書き）

本編になります。

一応この話の主人公であるギルベルト視点です。

生暖かい目で見守ってあげてください。
では、どうぞ。

01：出会い

春の木漏れ日も射してくるようになった3月下旬。

暖かな陽射しの中何処からか鶯の鳴き声が聴こえてきた。

「…ちよーのどか」

何故か目が覚めて早く起きてしまいやることもなかったので、俺は意味もなくベランダを開け放っていた。

今日は仕事もないし、長く寝られると思ってたのに…。なんとも勿体ない気分になる。

5時半。この時間に起きているのなんてアパート内じゃ大家ぐらいだろう。

大家は自分より若いように見えてだいぶ爺さんらしい。そのくせ塩分を過剰に摂取しやがるもんだから高血圧。だから妙に早起きなのだ。

・・・早起き。

その言葉にある人のことを思い出す。

俺の親父であるフリードリヒだ。

親父も何だかんだで早起きで俺が起きる頃には家事を一通り終わらせて、仕事へ行こうとしている場合がほとんどだった。

親父は軍職の結構なお偉いさんで辛く忙しい役職だったにも関わらず、俺の前で弱音を吐くようなことは一度もなかった。

俺が街へ出て働きたいと言ったときは真摯に受け止めてくれたし、実際に街へ出ていくときは優しく送り出してくれた。

…その親父ももう、この世には居ないが。

2カ月ほど前、癌で逝ってしまった。敬愛していた親父を喪った悲しみはまだ薄れていないけれど、俺は少しずつ立ち直り始めていた。

つと、朝からネガティブになっちまった。
せつかくのなんの予定もない休日なんだ、ひたすら意味のないこと
にでも費やして体を休めよう。

そうだな、トーニョに借りたテトリスでもやってみよう。そんで――

『ピーンポーン』

…新聞屋か？

朝っぱらから迷惑っつー言葉を知らねえのか…？

この際もうきっぱり断った方が楽だと判断して、玄関へと向かった。

「スンマセン、新聞なら…」

ここで言葉が止まった。

扉の前に居たのは俺の肩下程度の身長少年だった。見た感じ中坊
つてところだろうか。

髪は金色、目は碧眼。朝日が反射しキラキラと輝いていて、とても
美しかった。

…流石に新聞屋じゃあ…ねえよな…

ならきつと部屋でも間違っちまったんだろう。俺はまったく顔に覚
えがない。

「部屋とか間違えてねえ？名前教えてくれりゃ案内してやつけど…」

そう俺が言つと少年は口を開いた。

「ギルベルト・バイルシュミット」

「…え？」

「俺は、あなたに会いに来た」

言い切ると少年はじつと俺を見つめて続けた。

「あなたに話さなければならぬことが沢山ある。俺からの話も、
カッテさんからの話も」

「…カッテさんから…！？」

カッテさんとは親父の親友とも言える人で、よく俺も遊んで貰ったりした。

…これは、話を聞かなきゃいけない。

俺はとりあえずこの少年を家に入れることにした。

少年はルートヴィッヒと言うらしい。確かベートーベンと同じ名前だな、とかどうでもいいことを思いだした。

「んで、本題だ。お前はなんで俺のここに来たのか、まずその理由を教えてくれねえか」

そう切り出すと、ルートヴィッヒは「落ち着いて聞いてくれ」と前置きをした。

そして俺が予想もしていなかった言葉を口走った。

「俺は、あなたの弟だ」

「……………はあ!？」

ここから、俺の人生は少しずつ、少しずつ変わっていくことになるのだが。

勿論このときの俺はそんなこと知るよしもない。

01：出会い（後書き）

さて、どうでしたでしょうか。

ほとんどフリッツ親父の話で埋まった第一話です。

作者は生粋の芋クラストですが親父も大好きです。よってこの結果に。

次はもつとルートを出したいな、と思いつつ、後書きといたします。
次回作も宜しければお付き合いください！

02：説明（前書き）

長らくお久し振ります。

気付いた時には一話目から二ヶ月以上過ぎてました。嘘だろ、なん
でさ…

そんなこんなで二話目でございます。
宜しければお楽しみください。

02：説明

「俺は、あなたの弟だ。」

俺は困惑していた。

むしろ初めて会った少年に弟とか言われて平然としてられるやつが居るのか？居るなら少しでいい、そいつツラ貸せ。

「えー…と？」

ルートヴィツヒと名乗ったその少年は申し訳なさそうな表情をしながら言葉を紡ぐ。

「済まない、こんなことをいきなり言われたら気が動転するのも当たり前だろう…」

だが、これは真実なんだ。

ちよつと説明が面倒な事情があるんだ…」

そうして視線を少しさ迷わせてから、意を決したように真っ直ぐ俺を見据えた。

「…俺は昔、覚えてないが凄く小さいときに産みの親を亡くした、らしい。」

それで親族だった貴方の父、フリードリヒの元に養子として籍を移したんだ。

それからまあ、事情はよく分からないがカッテおじさんのところで育てられた。

理由は知らないけど、預けられてから家の敷地のなかで過ごす日々がほとんどだった。

本を読んだり適当に運動したりして毎日を過ごした。たまにフリードリヒさんも来てくれて外の色んな話をしてくれた。カッテさん夫婦も優しくかったし、生活に不満なんてなかった。

——そうだ、なかった。無かった。」

自分に言い聞かせるように、言葉の意味を噛み締めるかのように、ルートヴィッヒは呟いた。

碧い目は何処かを見ているようで、けれど俺にはどこを見ているか分からなかった。

遠いことを思い出す様にルートヴィッヒはまた話を進め始める。

「あのとき、空はとても綺麗に晴れ上がっていた。雲一つなくて、澄んだ青空をしていたから、フリードリヒさんを思い出して、なんとなく逢いたくなった。」

それから書庫にあった本を読んでいたら、カッテさんに呼ばれた。いつになく険しい顔をしていたから、凄く怖かった。

……そこから先の記憶は凄く曖昧なんだ。気付いた時には全部が終わっていて、フリードリヒさんの死を知っている自分が居た。

…そして、俺はフリードリヒさんを亡くしたことで最後の肉親である貴方に預けられることになった。だから今、ここにいます。」

ひとしきり話が付いたといった感じに言葉を終えたルートヴィッヒ。余りにいきなりな話の展開に混乱を覚えながらだが、何となくは納得した。

産みの親を亡くして、親父が養子に引き取り、カッテさんのもとで暮らし、親父が死んだことで俺に預けられ——

——ちょっと待て。

一つ気になった点があった。

「あの、よ。お前は親父の子供としてでカッテさんのもとで暮らしてたんだろ？」

「だったら俺に預けられるなんてことするよりかカッテさんのところに居た方が…」

びくり、と。

何気無く問い掛けたその質問にルートヴィッヒは大きく体を震わせた。

それは、明らかな怯え。

口にしたくない、ということだろうか。この少年は俺には分からないことで怯えている。

…分からないことに手を突っ込めるほど恐れ知らずじゃない俺は話を変えることで空気を変えることにした。

「そついやよ、ずっと気になってたんだ。カッテさんからの話ってなんだ？」

するとルートヴィッヒはズボンのポケットの中から白い封筒を一つ取り出して机の上においた。

読め、ということと受け取った俺は早速中の手紙に目を通す。

『拝啓ギルベルト・バイルシュミット殿』

こんにちは、ギルベルト。この手紙を読んでいるということはルートヴィッヒは無事君の元に着いたということだろう。

全ての説明は終わっていると思うが、彼が言っていることに嘘はない。

そうなる君のことだ、なぜ自分の元に預けられたのか疑問を抱いているのだろうね。

実を言うとそれは彼たっての家を出たいという要望だったんだ。理由は分からない。ここでの生活に嫌気が射したのかもしれないし、他の理由かもしれない。

ともかく家を出たいという希望を叶えられ、かつ信頼の出来る人間……それで君に白羽の矢が立ったわけだ。

ギルベルト、これは個人的なお願いだ。

彼は今12歳だけど、既に産みの親と養父、3人の大人を亡くしているんだ。

一人亡くすことすら辛いのに、3人、しかも12歳の子供が亡くしたんだ。

出来ることなら。

彼を本当の弟のように愛してあげてほしい。

君なら傷を埋めることが出来ると信じている。だから、頼む。

ルートヴィッヒを、宜しく。』

その言葉で手紙は締め括られていた。

——普通の人が、普通に持っているものを失った、少年。

——何かに怯えている少年。

俺は……こいつと打ち解けられるだろうか。こいつを愛することが

出来るのだろうか。

——知るかよ、んなこと。

「おい、お前——！」

「……！？ ど、どうした……？」

いきなり大声を上げた俺を驚きの表情で見つめるルートヴィッヒ。気にせず、立ち上がった俺はズカズカと彼の真横まで歩み寄る。

「俺はお前が何考えてっかなんて知らねえ——！」

どんな体験をしてきたかも知らねえ——！！

けどよ、お前は俺の弟だ——！ そうだろ？

なら遠慮は要らねえ、甘えろ、頼れ——！！ お前のお兄様はこんなにも頼りがいがある——！！——

——最低でも、撫でてやるくらいはしてやれるからよ。ルツツ」

くしゃりと、金色の髪を撫でてやる。

人の頭を撫でるのなんて初めてのことなもんだから力加減が分からん。

それでも、撫でてみる。

やがて、撫でられている方からの声が出た。

「……………ありがとうございます……」

何処か他人行儀なその言葉を聞いて撫でる手に力を込めた。

「痛っ！！！！……？ いたたたたたた！！！！……」

「ばっか、お前そういうときは普通にありがとうでいいんだよ。自然体でいる自然体で！」

そして、またくしゃりと頭を一撫でしてやると、小さな声で、ルツツは言った。

「……………ありがとう、兄、さん」

その言葉に意識しないうちに優しい声音で俺は応えていた。

「どういたしまして、それで、宜しくな、ルツツ」

そんなこんなで。

不器用な弟との共同生活が始まった。

02：説明（後書き）

はい、説明乙な二話目でした。

この回は俺、この話終わったら小ネタ突っ込むんだ精神で乗りきりました。結果説明乙な話に（ry

次回からはもっさりネタを突っ込んで行く予定です。マカロニとか悪友とかぶちこみたい…なあ…（遠い目

兎にも角にもここまで読んでくださった皆さんありがとうございました！

今後の参考のため感想・要望などありましたら下さると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1197s/>

俺様の弟を紹介します。

2011年10月8日22時06分発行